

有明海のタイラギの復活を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産研究・教育機構 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 健夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008509

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



有明海のタイラギの復活を目指して

有明海・八代海漁場環境研究センター 資源培養グループ 栗原 健夫

「幼いころは、よくタイラギを食べたものですけれどね」。有明海のそばで育った同僚が、この二枚貝の味を懐かしんでいます。残念ながら、有明海のタイラギは今の食卓には上がりません。このタイラギは1970年代には年に数万トンも水揚げされていたのですが、近年は激減し、禁漁となっているためです。

有明海のタイラギはなぜ減ったのか？ どうすれば増やせるのか？ 私たち西海区水産研究所は、長崎・佐賀・福岡・熊本の各県や瀬戸内海区水産研究所とともに、この問いに取り組み続けています。

そもそも、研究に使えるほどの質・量のタイラギを、今の有明海から得ることからして困難です。そこで、私たちはタイラギの親貝に卵を産ませて、それを長い間、ときには1年以上も飼育して、研究に適したサイズにまで育てました。そして、このタイラギ人工貝を使い、室内や海中で実験しました。たとえるなら、実験用のマウスを増やすところから始めるという、時間のかかる研究です。

この研究のうち、ここでは、2017年の実験の一部を紹介します。この実験では、タイラギ人工貝を有明海のいろいろな海域に移植し、よく育成してくれる海域を見つけ、その環境の特性や育成場所としての適性を見出すことを狙いとしました。移植先の1つは、島原沖の海域で、かつての漁獲の規模ははっきりしませんが、漁業者などによると現在でも大きなタイラギが残っている場所です。もう1つは、これより北の大牟田沖合の海域で、かつてのタイラギ好漁場でありながら、近年は大きなタイラギのほとんどいない場所です(図1)。



図1 移植直後のタイラギ(写真)と移植先(地図)

縫い目などからカニ類など肉食性の動物が侵入しているのが、島原沖より大牟田沖で目立ちました。そこで、島

両方の海域の約10m深に、漁網や塩ビ製パイプで作った、3タイプの器材を設置しました。これらの内部に長さ10cmほどの人工貝を移植し、2~3カ月後に回収しました。その結果、生残率は島原沖で12~58%、大牟田沖では常に0%となりました。

なぜ島原沖だけで人工貝が生き残ったのでしょうか？ 海中の器材を潜水観察すると、漁網の

原沖では肉食性動物によるタイラギの捕食が起これにくいのではないかと考えました、この考えを確かめるため、網の目の広さを調整し、肉食性動物の侵入しやすさを変えた金属製ケージを、両方の場所に8~10月に設置し、中に人工貝を入れておきました。はたして、肉食性動物の侵入しやすい網目の広いケージでは、島原沖と大牟田沖の間の生残率の差が開いたため(図2)、島原沖の高生残率の一因として小型動物による捕食の少なさを有力視しています。また、同じ実験で、島原沖に移植した人工貝は生残率だけでなく成長率も高かったことから(図3)、島原沖で生残・成長を同時に高めるような要因(たとえば餌の質・量の高さ)がある可能性を考えています。

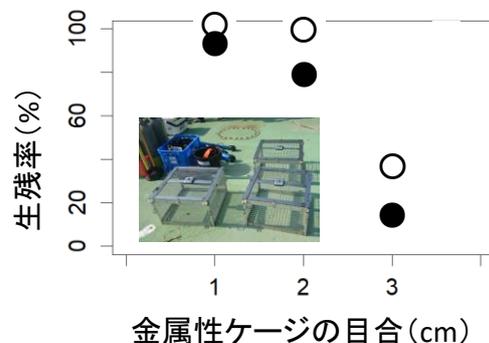


図2 金属製ケージ(写真)と目合ごとのタイラギの生残率(●:大牟田沖、○:島原沖)

このように、今回の手法に限って言えば、島原沖は大牟田沖よりもタイラギ人工貝の育成に適した海域のようです。その背後には捕食者の少なさなどがあるようです。

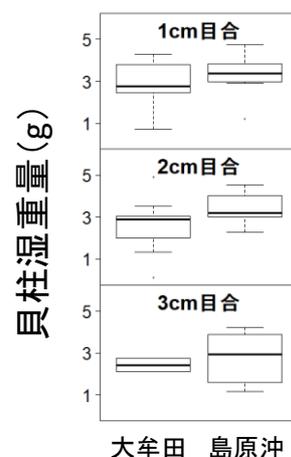


図3 金属製ケージ内に移植したタイラギの回収時点の貝柱湿重量(成長量の指標)

私たちは、この考えの正否や、タイラギの生残・成長のさまざまな変動要因について、研究を続けています。そうして有明海のタイラギを「よく食べた懐かしい食材」から「よく食べる今の食材」にしたいと考えています。

(本研究は、水産庁「二枚貝資源緊急増殖対策事業」と環境省「有明海二枚貝類の減少・要因解明等調査」の予算を受けました)